

せりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成22年 10月 第116号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

『いのち』を感じ取る『こころ』が福祉の原点

奈良県立万葉文化館館長・中西進先生のご講演『福祉の<こころとかたち>』を聞く機会がありました。老人ホームの運営を始めて25年、著名人の講演を聞く機会が数多くある中で、最も強く印象に残る内容で、人間の知性の素晴らしさを改めて実感させて頂きました。

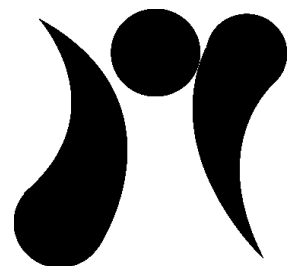
人間の全ての行為は『幸福』の一点に向かうものであり、自らの幸福を感じ取る『こころ』が福祉の原点だと、始められました。そして、大きく心に残った事柄3つをご紹介します。

一つ目は、『生命』と『いのち』の違いです。『生命』は活動しなくなると其れでお終いだが、日本人は昔から、人が死んだ後にも永く『いのち』の存在を感じ取ってきた。同じ状態にあっても、其れを苦しいと感じるか、幸福と感じるか、それは感じ取る『こころ』の在り様に任されており、死後にも存在する『いのち』を感じ取る『こころ』が、自らの幸福を感じ取る心につながっている、と話されました。そして、『生命』に『いのち』とルビを打つ教科書の訂正を申し入れ、余り意見を聞き容れない文部科学省が意見を聞いてくれた、とも言われました。

そして自分成りに、生命活動の終わりが縁の切れ目になっている無縁社会の現実が、何となく理解し得るようになってきました。死に向き合いながら暮らすお年寄りの側に居て、死を避ける努力を最大限に求められる現在の介護現場の混乱を目の当たりにし、生命の終焉に遭遇する介護現場でこそ、死後の『いのち』の存在を感じ取る『こころ』の大切な事を、是非とも心に留めておきたい、と願いました。

二つ目は、『寂しい』想いについて。『寂しい』とは、古びた鉄が錆びるがごとく、その物らしい状態になる事や、その人らしく老いていく様子を、肯定的に見つめる想いであり、

《次ページに続く》



自然界の一員として生まれた人が、衰えて一人で孤立して生きることを美德とする、日本人のポジティブな心を表現している、と話されました。老いの中の自分らしさを見つめ直し、寂しい想いを抱く中で、自らの幸福を感じ取る心が生み出されることを、心に刻みました。

三つ目は、『悲しい』想いについて。ホテルが演台に用意したコップが壊れても自分は悲しくないが、永く愛用しているこの懐中時計が壊れると凄く悲しい、と言われ、愛する人や愛着のある物が無くなったことを悲しむのは、自分を愛おしく想う心の表現だと話されました。悲しむ自分を愛する心が、自らの幸せを感じる心に繋がって行く事を心に刻みました。

最近の介護や福祉の世界では、高齢者が寂しい想いや悲しい想いをしない為に介護予防が重視され、地域の人やボランティアに優しい思いやりのネットワークを求めますが、表面的で薄っぺらな優しさは、高齢者を尊敬する態度にも、その自立や幸福を支える介護にも繋がらない事を思い知りました。超高齢社会の入り口に差し掛かった今、老いと死と命に向き合いながら暮らすお年寄りの側に居て、その幸福な暮らしを支える介護を行う上で、最も大切な視点を示唆して頂いたことに、心から感謝しました。

高齢者介護に携わる者として、老いと死に向き合うご利用者を人として尊敬し尊重する知性と、自立と幸福を支える本当の優しさを身に付け、死後にも『いのち』の存在を感じ取る『こころ』を忘れずに介護したい、と心より願います。介護職の多くが其れを身に付けたとき、介護への評価が大きく変わり、介護報酬にも反映されるように思います。

そして先生は、これからの日本人にとって、自分を耕す文化や教養が大切だと言われ、ターミナルケアに通じる『かたち』として、『俳句』を薦められました。俳句を作るとき、季語を入れ、言葉を短縮し、意図を凝縮して表現する過程で、自分の命を自然の一部として意識する事が求められ、自然と一体となって生きる自分に思い至ることが可能になる、と話されました。

自分自身も含めて、これから高齢期に入る多くの高齢予備軍にとって、幸福な想いで自らの人生を締め括る為の、最も大切な示唆を感じ取ることができたように思います。寂しいとき、悲しいとき、苦しいとき、其れから逃げるのではなく、その想いの中にいる自分を愛おしく大切に想う心が、自らの幸福を感じ取る『こころ』につながる事を心に留めて、生きて行きます。

要介護になったご利用者の老いと死に向き合う介護現場に身を置くからこそ、自らを耕し、ご利用者の『寂しさ』や『悲しさ』を理解する知性を身に付け、見送ったご利用者の『いのち』を感じ取る『こころ』を持ち続けたい、と願う心が芽生えました。と同時に『俳句を勉強してみたい』と想う心が芽生えた一日でもありました。

平成22年度第3回グループホーム・小規模多機能運営推進会議の報告

日時 平成22年10月2日(土) 14:00~16:00

特養1Fホールにて

意見交換

第三者委員・ご家族

- ・ 急変時に落ち着いて対応ができるかどうか不安がある。
- ・ 4年前、父が救急車で運ばれ延命治療を受けた。まだ、入院している。特養の入所申し込みし待機中。
- ・ 最近グループホームに入居、在宅時より落ち着いてきた。
- ・ この場でいろいろな意見を聞き、親の死について考える機会になった。
- ・ 10/1(金)翔の会に参加し、介護する者、される者の立場を越え共生について学んだ。

施設長

- ・ 万葉集の研究者で奈良県立万葉文化館長 中西進先生の講演から
日本人は古来、人が死んでも残るいのちと向き合っていた。そのことが万葉集の中に残されている。人の心の中の寂しい、悲しい気持ちも表面的にネガティブにとらえるのではなく、人として本来あるべきところへ戻っていく、そして死んだあとにもつながっているいのちと向き合っていく大事な想いととらえてきた。

万葉集の研究から世の中の動き、福祉の原点に言及された知性に感嘆した。

第三者委員

- ・ 中西進先生の講演の報告を聞き、寂しい、悲しい想い、いのち、幸福について思い巡らす機会となった。もう少し詳しく聞きたい。

ケアハウス等空き情報 <平成22年 10月15日現在>

《ケアハウス》

・ 恵泉	: 1人部屋若干	・ 第二ケアハウス恵泉	: 若干
	: 2人部屋若干	・ 沢ガ 御津	: 1人部屋1室
・ 香楽園	: 1人部屋1室	・ あさなぎ	: 2人部屋1室
・ ケアハウスアピリア	: 1人部屋8室	・ 青山苑	: 1人部屋2室
	: 2人部屋1室		: 2人部屋2室

グループホーム憩いの家

1室

[問合せ]せいりょう園介護相談室 Tel.(079)421-7156/(079)424-3433



講師 浄土真宗光念寺 本多正尚住職

今月の仏教講話は今年6月に続いて加古川町寺家町、浄土真宗大谷派、光念寺本多正尚ご住職に講話頂いた。世間話的に講話を開始される。国内外に悲惨な、ある意味これまで考えられないような事件が相次いで起こっている。少し詳しく話されたのが、宝塚市で発生した二人の女子中学生による家族殺人事件。A子(15歳)、B子(14歳)の二人が「お互いの家に火をつけて、家族を殺害しよう」と計画した。

『家庭』には、親子、夫婦、兄弟といったいろんな関係があるが、今、そういうものを壊してしまおうとする動き、作用が働きやすくなっているのではないか。簡単に壊してしまおうとする気持ち。それで解決できるというんでもない発想。一方で『虐待』で子供を死に追いやった報道も頻繁に耳にする。そんな時、親は決まって『しつけ』を口にする。住職は「この子を何とかしてやりたい！という思い・心がないと、その行為はしつけではなく、虐待です」と言われる。

ご住職がある会合で見た話をされる。そこに重い病気の奥さんの手を引き、甲斐甲斐しく奥さんの世話をする主人がいる。さぞかし仲睦まじく過ごされてきたものと思いきや、聞いてみて驚きであった。この奥さんは満州でひどい目に遭い、終戦を迎えた時、主人を重病で亡くす。戦後のどさくさで満足な弔いもできず、中国人の手を借りて茶毘(だび)に付し、お骨を拾って二人の子供を連れ、髪を切って男装をして日本に帰ってきた。ご主人の実家に戻る。健在であった主人の両親の勧めで、主人の弟と結婚。当時としては珍しくない話であったかもしれないが、当人同士の気持ちは？主人は浮気して、家を出て行ってしまった時期もあった。しかし、今は一心に奥さんの世話をしている。何が彼を変えたのか？人は生きていく中で、いろんな苦しみ、悩みを知っていく。苦しみ、悩みは人にとっては闇であり、闇とは煩惱のことである。即ち、私達の悩みや苦しみの根元には煩惱がある。物理的な光は、地上の闇を照らし、地上に明るさをもたらすが、人の心までは照らせない。悩みや苦しみを和らげることはできない。『我々の救われる道は、仏の光明に出遭うことであり、それは我々にとって、比較を越えて唯一なる道である。』とするのが親鸞聖人である。『闇が破られると、教えに出会う』。

この世には仏教界で言われる四苦八苦で代表される沢山の苦しみがある。根本的な苦しみを生・老・病・死(しょうろうびょうし)の四苦とし、四苦に加え、

- ・愛別離苦(あいべつりく)…愛する者と別離する苦しみ
- ・怨憎会苦(おんぞうえく)…怨み憎んでいる者に会う苦しみ
- ・求不得苦(くふとく)…求める物が得られない苦しみ
- ・五蘊盛苦(ごうんじょうく)…あらゆる精神的な苦しみ

の四つを合わせて八苦と呼ぶ。

いくら努力しても報われない行為が生じるかもしれない。そんな中で我々にできることは何か？最後にご住職が言われた事は『皆さんがこれまで歩いてこられた中で得た言葉を何らかの形で残しておいて欲しい。日記でもなんでも……。でないと家庭は崩壊してしまい継続していきません』

講話の最後の括りの所で、少し落ち着かない雰囲気の方がおられたが、様々な方が参加して下さる事に意義があると思います。今後ともよろしく申し上げます。有難うございました。

せいりょう園 毎週の行事

- 月曜日 のびのびルーム（自彊術）
火曜日 のびのびルーム（映画会）
水曜日 のびのびルーム（カラオケ）
音楽療法
自彊術療法
木曜日 のびのびルーム（自彊術）
金曜日 ピアノ教室
陶芸教室 造形教室
- 第2火曜日 折り紙教室
第1・3火曜日 書道教室
第2・4水曜日 お話グループ・福寿草の会

せいりょう園 11月の行事予定

- 11月 1日(月) 仏教講話
共生の会
11月 4日(木) 童謡唱歌
11月 6日(土) 園長との懇談
11月10日(水) 昼食会（すきやき）
11月15日(月) 美容の日（従来型）
11月17日(水) 美容の日（ユニット型）
11月19日(金) 郷土料理（かつめし）
11月22日(月) 理容の日
11月26日(金) 介護についてみんなで語ろう会
～利用者の外出について～

10月10日 長砂子供会秋祭り



久しぶりに目の前で見えたおみこしに、
感激のあまり涙ぐまれる方もあり、
皆様大喜びでした



介護についてみんなで語ろう会

テーマ「入所にいたるまで」 9月24日(金)

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

特別養護老人ホームの待機者はどこの施設も100人以上の待機があります。せいりょう園でも平成22年10月1日現在で361人の待機者の方がいらっしゃいます。自宅での介護が難しく、緊急に入所の申込みをされてもすぐには入れないのが現状です。

せいりょう園の入所は、緊急性や申込みの順番などを考慮し決定しています。それに至るまでには、せいりょう園の方針を理解していただけるように、申込みの段階から老人ホームでの生活について事前に考えていただいています。

今回の語ろう会では、入所にいたるまでに伝えていることを皆さんにも考えてもらいました。

○せいりょう園の方針について

高齢者本人の持つ生活力と生命力を十分に発揮してもらうことを基本とし、利用者が社会人としてそのベストを尽くし、尊厳のある生活を実現できるように支援します。緊急やむを得ない場合を除き、利用者の行動を制限する行為は行いません。認知症の症状や身体機能の低下を考慮すれば、転倒や感染症などの不慮の事故が起きる可能性も否定できませんが、常に自立支援の原点に立ち戻り、生活の質を高めることを目指して介護します。

○ディスカッション

せいりょう園の方針を元に、二つの出来事について皆さんと話し合いました。

転倒の危険性のある方でも、車いすから立ち上がらないように縛るなどの拘束や抑制はしていないことについて

- ・部屋の中で転倒していた場合、発見は誰がしてくれるのか？転倒したということを知らせる術はあるのか。

吉田：部屋の中で転倒していた場合リアルタイムに発見することは難しいです。ただし、転倒の際には大きな音が聞こえたり、一日に何度も訪室しています。ナースコールもついています。コールを押せる能力のない方や緊急時はコールを押せるような状況ではない場合が多いと思います。本人のプライベートな空間が確保され、尊重された生活を提供させていただく代わりに、ある程度リスクの中で生活することになります。

日中は玄関にカギをかけていません。外出された場合は後ろから職員がついていくことについて

- ・家族としては外に出て行って欲しくない。自宅ではGPS機能の付いた携帯電話を持たせるようにしたり、着衣につけるようにしている。徘徊し戻ってこれなくなったとしても携帯電話の画面でどこにいるか確認できるようにしている。

吉田：その行為は監視にならないのでしょうか？本人のプライバシーは守られているのでしょうか？

- ・家族であれば監視しても良いと思っています。たとえ他人でも施設に入所になっている場合は所在確認の責任は施設にあるのではないかと？

吉田：所在確認はしますが、24時間監視している状態ではないので発見できない場合もあります。認知症という病気になれば何も分からなくなり、私達と同じ人間ではないという考えではなく、要介護状態の寝たきりの方でも、どう人間らしく、幸せを感じて生きてもらえるのかを介護方針としています。

○グループワーク

グループに分かれ、特にテーマを決めずに自由に話し合いました。

- ・実際出ていったら困る。外に出て転倒することは仕方ないが、怪我や骨折などされると困る。
- ・認知症を患っている人が病院で入院になると抑制、拘束される場合があるので、出来るだけ安全に生活して欲しい。
- ・他の施設を利用している際に、身の回りの事を勝手にすると、施設の職員に気を使う。
- ・薬を食事に混ぜて食べてもらうことに抵抗があるので、薬はご飯と別に服薬させている。
⇒飲み込みが出来にくい方はトロミのある粥に混ぜて食べてもらう場合もあるのでは？
職員：その場合は、トロミのついたお茶に薬を混ぜて飲ませたほうが、より自然なのでは？

- ・レビー小体型認知症を患っている家族を介護しているが、他人には見えない物が見えたり聞こえたりするので、対応にとまどいがあります。
- ・認知症の症状で物盗られ妄想があり、毎日とっていいほど財布や通帳を盗ったという疑いの電話がかかってくる。いつまでこの生活が続くのか憂鬱である。
- ・体が弱っていき飲み込む能力も弱っていった人が胃ろうをするのだと、思っていたが、元気な方でも胃ろうをする場合があると聞いたが。入所して胃ろうは薦められるのか？

⇒むしろ体が元気だが飲み込む能力が無くなった方が胃ろうの手術をする場合が多いのでは。例えば、脳梗塞の後遺症で飲み込むことが出来なくなった場合。

職員：主治医から手段としての胃ろうの説明がある場合があるが、術後の生活がどのような生活になるのかの説明を聞いていただいた上で判断してもらっているが、せりょう園では薦めていません。

⇒延命の為に胃ろうした方が、その後 8 年も生き続け、最近では口から食べられるようになり、常食で食べられるようになった。

職員：その例は稀だと思います。胃ろうの方は食べたくない時でも毎日同じ量の液体栄養が入ってくるので、体調が悪い時には嘔吐し、嘔吐物は飲み込めないので誤嚥してしまい誤嚥性の肺炎になってしまうこともある。

○感想

今回の語ろう会で皆さんのお話を聞かせていただいてびっくりしたのが、認知症の方の徘徊の所在確認の為に GPS 機能のついた携帯電話を本人に持たせている、という方が想像以上にたくさんいらっしゃったことです。GPS とは地球の周回軌道を回る衛星から発信される情報を利用して、受信者と GPS の衛星の位置関係を測定し、現在地の緯度・経度を計算するシステムで、家族が自分の携帯電話により所在確認が出来るのです。

所在確認の出来る GPS 機能のついた携帯電話のことは以前から知っていましたが、普及しているものだとは思いませんでした。私は、その行為は「監視」になるのではないか、本人のプライバシーは護られていないのでは？と皆さんに尋ねたのですが、「家族がしていることなので問題ないのでは」という意見を皆さん話されていました。この GPS 機能で所在確認をする行為は、徘徊を止めることが目的ではなく、自宅に戻れなくなり本人が困ってしまった時の為のものである、ということが理解できました。

一昔前までは、GPS 機能のついた携帯電話なんてありませんでした。今後はもっと便利なものが増えてくるとと思いますが、その都度「人間らしい生活」とは何か、を考えた上で本人の生活の質を高めることが出来るのであれば、上手く利用していく必要があるのだと思いました。

次回の介護について語ろう会は？

10月22日 テーマ「感染症について」
11月26日 テーマ「利用者の外出について」

せいりょう園待機者状況

<平成22年10月13日現在>

○入所判定済み者 380名

グループの内訳

Iグループ…132名/IIGグループ…149名/IIIGグループ…91名

○入所判定済み者の現在状況

在宅147名/特別養護老人ホーム入所中9名/医療機関入院中110名

老人保健施設入所中85名/ケアハウス入居中5名/グループホーム入居中11名/不明5名

辞退その他

死去7名/他施設入所1名